

パネルディスカッション\*

## 海域アジアとオーストラリアの21世紀を考える

パネリスト Purnendra Jain 氏 (アデレード大学教授)

堀本 武功 氏 (国際政治学者・放送大学客員教授)

竹内 幸史 氏 (拓殖大学大学院講師)

小林ハッサル柔子 氏 (オーストラリア国立大学研究員)

司会: 重松 伸司 (追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所長)



重松 ただいまの基調講演の中で、プルネンドラ・ジェイン先生は、オーストラリアが直面する対アジア政策の課題やジレンマを具体的に指摘されました。そこで、三人のコメンテーターの方々から、さらにご意見・コメントをいただきたいと思います。それではまず堀本先生の方からお願いいたします。

堀本 堀本です。よろしく願います。座ったままで失礼いたします。ジェイン先生とは、20年ぐらいの長い長いお付き合いで、今日は時間もありませんので3点だけ、簡単にコメンテーターとしての役割をやりたいと思います。

まず一つは褒めたい。すごく褒めたい。非常に面白かった。

実は数年前に初めてオーストラリアに行くときに、英語と日本語の本を5~6冊読みました。オーストラリアとはどんな国かというので読んでいました。いずれも、はっきり言うとどれも面白くなかった。それで何だこの本、くだらんなあ、英語も日本語もくだらんと思って、今日のジェイン先生のお話を聞いたらとても面白かった。なぜなんだろう、と、さっき話を聞きながら考えていました。

おそらく、私の断定的な結論は、ジェイン先生は元々インド系のオーストラリア人ということでもまず一つ目があります。今度は33年間オーストラリアにいたという2番目の目を持っている。そして3番目が日本研究をなさっていること。こういうふうには3つの目で物事を見る、特に政治学の面から状況を見るというのはなかなかできることではない、ということで、結果的にジェイン先生のオーストラリア観、オーストラリアに対する見方というのが非常に客観的、もっと大げさに言えば、もっと褒めて言っちゃえば普遍性が高い、というのが

\*パネルディスカッションでは、日本語の発言についてはプルネンドラ・ジェイン教授に対して英語通訳を行った。

多分一番大きな特徴ではないかというふうな感じがいたします。今日お話を聞いてハッと気が付いたら、普段日本の外交とかインドの外交を話すことはあるんですが、オーストラリアについては今までほとんどなかったんです。今日初めて本格的に、真っ当に、正直に、全部オーストラリアの話を聞けてとても面白かった、というのがまず第1点です。

2番目です。2番目は何かというと、今日も随所にいろいろな面白い見解をお話になり、なるほどなというふうに思っただけで聞いておりました。

テーマがオーストラリアにおけるアジアの難問、あるいはなぞなぞ、というふうな意味だと思うんですが、まさにそのとおりで随所におもしろい話が、例えば今日の最後から2番目のところに「残された課題」というところで、まさに今アジアが直面しているアジアの経済とそれからセキュリティ、安全保障にどう対応していくのかという二つの問題を抱えている。いわゆる一般的に「アジアのジレンマ」と言われているものですね。アジアのジレンマに対してどういうふうに対応していくのが今オーストラリアが直面している問題ということですね。

私などが時々見ていると、オーストラリアがえらいこと、格好いいことを言ったって、結局東南アジア諸国連合 ASEAN に入らないだろう、入らないで右に行ったり左に行ったり欧米に行ったりしたってしょうがないじゃないか、というふうな極端な意見を持っています。だからもしオーストラリアがこの先生きていくとしたら、あるいはこの先に生存を続けていくんだとしたら、自分の国、オーストラリアという国の定義をどうするのか。そしてその定義に基づいて、アジアという地域にも存在するわけですから、今までは単に存在しているだけであつたかどうかを言っているわけですが、これからはやはり周辺との関係性を重視する必要がある。それをどうするんだろうか、という辺りがやはり今日お話をお伺いして、これからのアジアにとってはとても大きな問題になるのではないだろうか、というふうな気がいたします。

特にこの中でも面白かった、なるほどなと思ったのは、この「アジアのジレンマ」という問題と、それからその前のほうでお話しになった「米国は依然として強力だが経済・軍事力的には相対的に後退」という点です。米国自身がそういうふうにはわざとやっているんじゃないか、という辺り、なかなかこれは示唆的で、本音をもっと言えば、もっとアジアどもにやらせようとしているんじゃないか、ということをおっしゃりたいんだろうと思いました。そういうふうな全体的に非常に複眼的にものを見るということが、今日のこの基調講演の中でお示しになったポイントだろうということ、これが2番目です。

そして3番目、これは質問に変わりますが、いっぱいお尋ねしたいことがあります。3番目の点は何かというと、結局のところオーストラリアは中国に対してどうしようとしているのか。もう煎じ詰めればアジアのどの国も、まあヨーロッパは違うかもしれませんが、例えば東南アジア諸国、インドもそうです。それから日本もそうです。アメリカもそうです。ア

ジア太平洋とかインド太平洋、いろんなことを言っているんです。結局、つまるところ、中国がどんどん伸びている。それに対してオーストラリアは自分の経済と安全保障をかけて両義的な、両面的な対応をしている。それはまさに自分の国の定義という問題にも絡むことなので、その辺のところをクリアにしない限りいつまで経ってもオーストラリアが持っている両義性と言いますか、アンビバレントと言いますか、そういった問題というのは解決できないだろうということで、この辺を後でまたもう少しお話しをいただけたらというふうに思います。

いずれにせよ、私は久々に心地よい講演をお聞きすることができて、大変うれしかったです。以上です。ありがとうございました。

(拍手)

**重松** それでは次に小林ハッサル柔子さんから、コメント、ご意見をお願いします。

**小林** オーストラリア国立大学からまいりました小林ハッサルでございます。私は国際移民研究という人の動きをやっております。現在東京大学の「人間の安全保障」プログラムのほうで客員研究員をさせていただいているんですけれども、その関連から移民、人を見ながらどういうふうに、ジェイン先生も今日くださったポイント、Conundrum を分析するかということちょっと申し上げたいというふうに思います。

一つは、移民というのが非常に面白くて、国際的に起こっていることを国内に持ってくるんですね。

それが私やジェイン先生も含めた移民の面白いアспектだと思っています。今日いくつか示してくださった Conundrum の中に、West-East Conundrum というのがあったと思うんですが、それが要するに西洋的な価値観と、オーストラリアの近隣諸国であるアジアという難問かという理解をしております。これは実は国際関係においてだけではなく、オーストラリア国内にも存在いたします。オーストラリアの移民政策というのを歴史的に見ていきますと、非常に予想外の失敗の結果、多文化主義になっているというふうに言うことができます。初めてオーストラリアが移民を必要としたのが戦後、1947年、当時のチフリー政府のもとで移民政策を、まだ白豪主義の中で行うんですが、要するに経済的に労働力が足りなかったということが、三つある要因の中の最も重要なことになります。

ところが、入ってきてくれた移民は北ヨーロッパの移民ではなく、南ヨーロッパの移民が入ってきてしまったんですね。それで実際にシドニーであるとかメルボルンとかアデレードに、イタリアンタウンであるとかグリーンタウンみたいなものができてきます。それがオーストラリア政府に対して、このままでいいのか、という挑戦を突き付けていくことになります。そして1975年に白豪主義を撤廃して、どうしたかというポイントシステムというの

を入れるんです。それは例えば、大学教育を受けている、工具スキルがある、年齢はもちろん若いほうがいい、そういういろんなことで何点以上になったら移民できます、というふうにするわけなんです。これは当初やはりヨーロッパから来る人を想定して、より技能の高い、スキルの高い人を入れていきかけたんですが、何とそこに入ってきたのがアジア系の移民であったと。アジア系の移民の人たちが、大学も卒業しているし英語もできるし、難なくポイントを上げて、ひゅっと入ってくることになった。まずそれで「あれ？」と思っていると、ベトナム難民も受け入れなければいけなくなるわけです。それでまあオーストラリアの人口構成というのが、もう決して逆戻りは歴史的にできなくなったと言われているんですが、それぐらい変わります。

そういう中でたくさんの移民たちがアジア太平洋地域から入っていくわけなんです。ジェイン先生ももちろんそういう移民として入っていかれて、私もそういう移民として入って行って定住することになったわけなんです。私がオーストラリアに対して一つ批判的に思っているのが、移民というのに対して、移民を本当にオーストラリアの社会の中に位置づけていくというより、経済的な需要を満たすための移民というのをすごく、特にアジアに対しては考えている。その一つがジェイン先生も講演の中でおっしゃったんですが、大学生です。国際大学生、International Studentと言われるんですが、留学生の授業料はオーストラリアの学生の3倍高いんです。だからこの数が大学の収入を決定していきます。そして最近導入されたのが、オーストラリアの企業に対して投資をできる、高額の投資をできる人に対して永住権を差し上げますと。この応募者の90パーセント以上が中国の方です。大陸の中国の方です。だから結局経済を満たすための移民というのがやっぱり続くわけです。

その一方でオーストラリアの西洋的な価値は変えない。われわれ移民には投票権はありませんから。国民になるまで。政治的な権利はあまりない。だけれども経済的にはオーストラリアの需要を満たす。そういう中でオーストラリアのアジアに対する理解が不十分なままだと私は思っています。例えばホワイトバーバーが出たとしても、その中にアジアの言語を早くから子どもたちに教えるというようなことが謳われていたとしても、結局今アジア言語教育は本当に縮小しています。取りたい人がなくて。

そういう中でオーストラリアがもし本当に、ただ経済とかセキュリティであるとか、政治も重要な問題なんです。それだけではなくて、社会と社会として、お互いに理解を高めて絆を強めていこうとした時に、今のオーストラリアの理解は不十分ではないのか、というのが移民から見た East and West Conundrum というふうに申し上げたい。それが一点。

もう一つはセキュリティの問題なのですが、ISIS、今日本でもすごく日本でも話題になっていますが、この脅威がオーストラリアではまさに国内問題になります。それはどうしてかという、イスラム教徒の移民が非常に多いからです。移民を通じてこの問題が国境を越えて本当に去年は国内に入ってきました。そしてどういうことが起こったかという、イスラ

ム教徒の人たちを非常に差別化する、他者化する、周辺化するという言説がメディアを通じて、もう盛んに行われました。オーストラリアに住んでいながら、こんなオーストラリアは見たことがない、次は（移民である）私かもしれないと思ったぐらいに、ちょっと恐怖を感じるぐらいだったんですけれども、その時アボット政府ではあまりうまくそういう対応はできておらず、アボット政府もイスラム教徒の周辺化に加担する形になっていったんですね、結果として、その中で要するに西洋的な価値観のオーストラリアとイスラムという、これは東洋ではないんですが、要するに非西洋的なものに対する Conundrum が別の形で国内で勃発していることになります。

この時に非常に重要な役割を果たしたのが、イスラム教徒の実は移民たち、それから移民の子孫たちです。彼らは非常に明確に、自分たちはオーストラリアの国民である、市民である、あるいは永住権保持者である、だけでも同時にイスラム教徒であるということを、非常に強く効果的に打ち出します。そしてさまざまなメディアを使いながら、人々の不信感を払拭するために非常に努力を重ね、イスラム教徒のリーダーたちもイスラム教徒のオーストラリア人であるというアナウンスメントをイスラム教徒コミュニティ及び非イスラム教徒であるマジョリティーのコミュニティに対して行う努力をしていました。そういうことを見ながら一つ考えたいのは、東洋と西洋、あるいは西洋的なもの、非西洋的なものというのをはつきり分けるのではなくて、その間に実は存在する移民たちがいます。私たちのような、その人たちをいかに効果的に使うか、そしてそれによってさまざまな文化的な葛藤、経済的な葛藤といったものを回避していくのにどういうふうな方法があるのか、といったことを考えてみるといいのではないかと、ということをおっしゃって、私の移民研究からの Conundrum のテイクを終わらせていただきたいと思います。

（拍手）

**重松** それでは竹内先生、かつてのジャーナリストのご経験も含めてお話しをいただければと思います。

**竹内** はい、ありがとうございます。重松先生、今日はお声をかけていただきまして、本当にありがとうございます。私自身関西には4～5年勤務していた経験ございまして、朝日新聞社の大阪本社と神戸支局にいました。神戸時代にオーストラリア人の妻と知り合いましたもので、その延長で私が今日ここにいるという、そういうことなのかなと思いながら皆さんのお話を聞いておりました。プライベートなことをもう1度言いますと、神戸日豪協会という団体に大変お世話になりました。特にそこで事務局長だった古澤峯子先生という方にオーストラリアの基礎から教えていただいて、そして仲人までしていただいた思い出があります。その方が日本語の先生をされていたクイーンズランド大学を目指して、私の娘が今、受

験勉強の最後の追い込みをしているという、そんなこともあります。その娘の高校の卒業式が来週あるもので、明後日オーストラリアに行くという、そんな状況の中で、今日こちらに来させていただきました。よろしく願いいたします。

私自身、重松先生からもご紹介ありましたが、新聞記者を以前している時には、1994年から1996年までバンコクにおりまして、さらに2001年から2004年までニューデリーにおりました。この時にいろいろ東南アジア、あるいは南アジア、インド洋諸国、さらに地域協力、そしてオーストラリアの姿もいろいろ見たり、また取材に行ったりしておりました。特に私はバンコクにいる90年代にはASEANとAPECを担当しておりました。その時の話から少し話してみたいと思っております。

皆さんのお手元に、グローブと書いてある、私が2010年に書いた記事の中にインタビュー「オージーを語る」というのがあります。そこでポール・キーティング元首相、90年代の前半にオーストラリアの首相を務めていた労働党の指導者にオーストラリアのアジア外交、アジア政策について聞いて書きました。その時この中の一つのトピックとしてAPECを取り上げました。日本とオーストラリアがパートナーシップを組んでAPECを構築していった。この2国が中心になってASEANや、アメリカの協力を取り付けていった。なぜなら両国とも一人だけではできなかったからです。特に日本はいろいろアイディアを出してみても、アジアでかつてのアジア侵略の歴史を抱えているだけに、ASEAN、あるいは韓国などから、日本があまり打って出ていくと反発があるという悩みを抱えておりました。一方、アメリカが動くにしてもアジアに米軍があるばかりで、それ以上のことは何もやってない。やはりオーストラリアが、特にこの一人前のホーク首相、それからキーティング首相の二人が非常に、まるで外交官のような活躍をして、日本の当時の宮澤首相に会えば、宮澤さんからは「インドネシアのスハルトさんに会って話を聞いてくれ」と言われるわけです。そういうやりとりの中で、オーストラリアの皆さんが駆け回り、そして日本と一緒にAPECを構築していったという話があります。

そしてこの中でも書いているんですが、ポール・キーティングの一つのキーワードとして、オーストラリアの外交哲学として「ミドルパワー外交」というのがあります。そしてもう一つのキーワードであるかもしれませんが、アメリカにとっても「Disagreeable Friend (良き苦言者)」の役割を果たそうよ、ということはこのポール・キーティングが言ってます。やはりアメリカという超大国を相手に、すでにジェイン先生からも指摘がありましたけれども、少し別の価値観で、ネットワーク重視で、カナダあるいは北欧ですとかヨーロッパの国々と関係プレーをしながらアイディアを打ち出していく。私自身は日本もそういう側の一員に立ったほうがいいのではないかと、という意見を持っていますが、日本でこれを主張すると、日本はミドルパワーじゃないだろうという意見が常に働いてくるわけです。

ただこれからのことを考えると、果たして大国外交ができるのかということが大きな論点

です。特に日本とオーストラリアの協力について、ジェイン先生は実は日本についての大専門家でもありまして、特に日本の ODA のやり方、経済協力のやり方などを非常につぶさに現地も見ながら研究されておられるので、いろいろ日豪協力パートナーシップについて、ジェイン先生、あるいは小林先生にも皆さんにもお聞きしたいところです。

今のポール・キーティングの話が続けますと、エリザベス女王の肩に手を回したり、いろいろひんしゆくを買ったりすることもある人で、そしてまた非常に強いオーギー弁をしゃべって、まあやっぱり労働組合出身であるだけに、ただそれだけ非常にコンパッションネートとか、思いやりのある人で、非常に温かな人柄を感じる人なんです。ただそれだけに時々ひんしゆくを買うこともあって、その中に教訓として覚えてる発言があります。1993年、APECの文脈の中ですが、当時のマレーシアのマハティール首相、彼は反米意識がとても強くて、93年 APEC の首脳会議が初めてアメリカのシアトルで行われるという時に、これにやっぱり反米の文脈から異論を唱えて、結局行かなかったわけです。ポール・キーティングがこの時マハティール首相に対して言った言葉があります。何て言ったかという、recalcitrant というんです。本当にその当時聞いても分からなかった。英語の辞書には載っている言葉なんですけども、偏屈者とか強情者っていう言い方なんです。われわれだとそういう開発独裁の強いリーダーに対して、ポキャブラリーがあんまりないんで、ストロング、ストロングというだけなんですけれども、やっぱり英語のネイティブスピーカーは recalcitrant なんていうのですね。

その後マハティールはちょうど、マレーシアでイスラム諸国機構の首脳会議があったタイミングもあり、結局このキーティングがぼろっと言ったことがさざ波を立てて、ユダヤ人の攻勢には負けなとか、そういうような発言を今度はマハティールがし出ししたりしました。後々マレーシアの人々、外務省の人などと話していると、やっぱりオーストラリアっていうと白人の国だろう？それがアジアの顔をしてずけずけ出てきて、それでおまけに反米意識の強いマハティール首相に対して強情者とは何事だと言っていました。あとは当時はオーストラリアの、ご存じの方もいらっしゃると思うんですけど、ポーリン・ハンソンという、アジア側からすれば本当にレイシストというようなレッテルを貼っていた人物がいました。僕自身彼女のことはよく知らないんですが、非常に物議を醸していた人物でした。その後のハワード政権の時にはちょうどアメリカはブッシュ大統領でしたから、その時にはオーストラリアは副保安官だとかシェリフだというような言葉を使ったり、deputy だとか言ったり、deputy とわれちゃ困るといふのをまたオーストラリアの外務省の人が言ったり、いろいろ物議を醸していました。

もう少しこの議論を深めるポイントとしては、やっぱりオーストラリアがアジアに入っていくことの難しさがあります。今 ASEAN も APEC も、それから EAS、東アジア首脳会議なんていうのもありますね。さまざまな地域協力でそれぞれ動いているんです。あとは

ASEAN に ARF というのがあります。ASEAN Regional Forum という、これは集団的安全保障を語り合うためなんですけれども、その中でかなり大きなテーマは、中国の脅威を共同管理するというのにかなり問題意識が移ってきています。それぞれの国が、つまり日本がどうだ、いやオーストラリアはこうだ、メンバーのあり方がどうだというようなことが問われるわけでもなくなってきています。それだけにアジア太平洋のさまざまな機構、地域協力が成熟化してきてるんだろうと思います。ただお聞きしたいのは、オーストラリアとしてアジアに入っていくことの難しさがやっぱりまだあるのだろうか、どうなのだろうかということをお聞きしたいと思います。

もう一点は、当然次のラウンドで中国との付き合い方の難しさという話がありますので、その辺でまた私も言わせていただきたいところです。

(拍手)

**重松** ありがとうございます。今3人のコメンテーターの方々に、それぞれご自分の専門領域と、そしてご自分のご体験を踏まえてコメントをいただきました。堀本さんと竹内さんのコメント、ご質問は若干ダブルところがあって、大変重要なポイントだと思いますが、まず、小林さんがご質問になった二つの点について、ジェイン先生にお答えをいただき、そして次に堀本・竹内さんのコメント・質問に対してお考えを述べていただくということにしたいと思います。

小林さんのコメント・質問は、少なくとも2点あると思います。一点は移民の視点から。これまで南欧からのオーストラリアへの移民、西洋からのオーストラリアへの移民が主であったけれども、アジアからオーストラリアへの移民も増加している。そうすると社会間、あるいは Nation 間の関係について、さらに理解を深めていくためには、オーストラリアがどのようなアプローチをとっているのかということが1点。もう1点はイスラームの移民がオーストラリアにも増えつつある。このイスラームの人々に対するより深い理解、より適正、適切な理解を深めるためにはどうすればいいのかという問題。この2点です。

さらに、堀本・竹内さんのコメントは、一言で言いますと、結局オーストラリアは中国に対してどのように対応していこうとしているのか。これは大変な問題だと思いますが、ジェイン先生のご見解を提示いただきたいと思います。

**Purnendra Jain** Thank you. I will try my best. I am not really an expert on migration issues. But since I live in Australia and teach Asian studies, I can comment based on my own experience as well as through what we read in the literature. More or less, I agree with what Kobayashi san has said about Australia and multiculturalism, Australia as multicultural society, and some of the challenges which Australia faces with regards to multiculturalism. She has some interesting points

to make and what is needed to be done a little bit more. Some critical points which she has raised in her presentation I broadly agree with all those kinds of comments. Then I want to perhaps mention that yes, Australia has been a multicultural society.

But multicultural as a concept in my view, is a one-way street that Australia as a country receives people from other parts of the world and they come and settle down there ; they learn what Australian culture is and integrate in society. But I think that Australia now needs to move beyond the concept of multiculturalism. And I call it interculturalism or interculturality. That is, people who come from outside, these are new Australians and people who have been living in Australia for long these are old Australians and how this new and old Australians interact with each other, it should not be a one way street as it has been in the past, it needs to be a two way street. In other words, the old residents, the old Australians need to learn what these new Australians are all about, why they had come, what they are. It's not just about sushi, eating sushi and you say well, look we love Japan or you eat dumpling and you say well, we have accepted Chinese culture or you go to a curry shop and have curry and say, oh how wonderful Indian food is and so on.

This is not multiculturalism, this is kind of your internationalization, right, part of your globalization, not multiculturalism. So multiculturalism has to be much more than that and I think in Australia there is a lot of debate going on, it's not that this debate has closed. Takeuchi-san talked about, Pauline Hanson, she is still politically active and often appears on television programs and so on and so forth, she has really made a huge impact on Australian society in a negative way and that raised the question what actually multiculturalism was all about. So in a sense, it was a silver lining for her to come and talk about this issue which made people more conscious.

I think Islam is a huge issue like in any other western countries like more in France at the moment and Europe in general, in the US as well as in Australia there is a big debate on this issue. And it's very hard for any government or public figures to comment on these kind of issues – it's a very sensitive issue. So people in general are very sensitive, but still you have a lot of people in the media who do talk about these things, and consensus is essentially that let's not blame the religion as such, that is Islam as a religion, but let's think about the perpetrators or people who carry out these kinds of terrible activities, how to deal with those kinds of issues. But in essence, even if government and the police and others might say they want to make a distinction between Islam as a religion and those Muslim people who engage in terrorist activity in the name of Islam, it has been difficult to tackle terrorism. But the general perception in Australia, you know, is that Islam teaches terrorist acts and such activities are carried out by the people who belong to that particular religion. So it becomes a very difficult conundrum in my view in Australia as elsewhere and I simply don't know how they are going to deal with these and I am not in the best position to comment

on this particular issue. But yes, this is a huge challenge.

Okay, I think on the second point on China, first of all . . .

堀本 今お話を聞いて思ったことは、例えばオーストラリアがアメリカによく似ているんじゃないかという印象なんです。つまりアメリカはわりと最初は移民国家で出発して、で、そのWASP、ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント、WASPと言われていたと、それが第1次世界大戦、第2次大戦の頃から、アメリカには、西洋、フランスとかの人たちが入ってきて、そして第1次世界大戦後は、今度は南欧系の人たちがどんどん流れ込んで東欧も入ってきた、というようなことで、アメリカの国家的な性格、あるいは移民国家という性格が変わってきた。そして第2次世界大戦が終わった辺りの頃はまだアメリカの中でも人種のもつぽということが依然として連ねてきたんだけど、80年代頃になったらもうそれじゃ対応できなくなって、頻りに当時のアメリカで言われるようになった言葉が「サラダボウル」です。サラダの中にはニンジンとかキャベツとかいっぱい入ってるけれども、全体としては一つのボウルの中にそれぞれの素材が混在しているという、サラダボウル論があるんです。

だけでも最近の議論を聞いていると、アメリカの場合はもうサラダボウルなんて議論は通用してない。もう極端なことを言っちゃえば、下手すると2050年までに今の3億の内のおお半が、50パーセントスペイン系が来る。スペイン系というか中南米系—いわゆるラティーノと言われる人たちが—が増える。だからそういう意味で言うと、国家の性格をどういうふうにかんがえるかというのはかなり深刻な問題をアメリカでは提供している。だからこそ今、大統領選挙で共和党も民主党もものすごく対立しているわけですが、それに引き換えオーストラリアを見ると、まだそこまでいってない。



つまりオーストラリアの2400万人ぐらいの人口の、まだ圧倒的多くは相変わらず白人だという。そこにアジア系が入ってきて、ムスリムが入ってきたとしても、イスラム教徒が入ってきて大して影響を受けない。

そこで、僕はギラード政権の報告書『アジアの世紀におけるオーストラリア』が出たんで、すぐ読んだんですが、まだ駄目だなと思いました。なぜまだ駄目かというのは、要するに自分たちはまだ相変わらず基本的な考え方としては白豪主義をとっている。だけでも時代の環境に合わせなきゃいけないから、われわれはアジア言語をやるとかそういういろんなことをやるんだということを言ってるんだけど、これは余裕の発言です。そうすると多分そういう基本的な発想を持っている限り、例えばオーストラリアの対外的なその政策についても、変えられないんじゃないだろうか。そうすると、じゃあASEANの東南アジア諸国連合に入ろうよ、なんていうのは起こりっこない。でもそういうことがない限り、オーストラリアが相変わらず性格を曖昧にしたまままでこれからもアジアの中で、場所もたまたまいるだけという状態が続くんじゃないかと、そういう疑問を感じました。

**重松** 今の堀本さんのコメントに対して一言だけ、移民研究の立場から再コメントを小林さんに求めたいんですが、今のアメリカの移民状況の変動の中、そこまですでにオーストラリアはいつてないんだという前提ですよね？

**小林** すばらしい質問をいただいてありがとうございました。本当に堀本先生のおっしゃるとおりなんです。そのタイムラインと割合としては、異論はないですし、国内の問題がそのままジェイン先生のConundrum、今日説明して下さったものにつながっていると私は思っているんで、このポイントをあえて出したんです。その問題の一つ鍵になっているのが、恐らく選挙権なんだと思うんです。オーストラリアの国会議員とか、今おっしゃったとおり人口だけでなく国会議員もほとんど白じゃないですか。もうちょっと私みたいな肌の色の国会議員がたくさん増えるといいなと思っているんですけど、それができないのは我々のような市民権を持たない移民には投票権がないからなんです。永住者は投票権がない、国民にならないと駄目、でも国民になると私は日本国籍を失うのでなれない、というのが日本だけでなく二重国籍を認めないアジアの国の大半なんです。だからオーストラリアは二重国籍を認めているけれども、だけれども自分が出てきた国では駄目だから、じゃあ選挙権は諦めると、他のことはほとんど同じようにできるんですけど。だから私は、アメリカと違って移民の声が政治化されない理由は、人口もあるんですけど、選挙権の有無が大きい部分があるのではないかと考えています。

**Purnendra Jain** Let me just comment on that.

重松 どうぞ

**Purnendra Jain** What has been said is important but it's an individual's choice whether you want to become an Australia passport holder and citizen or whether you want to remain a Japanese citizen living in Australia as a permanent resident. That's individual's choice. I had that choice, I left my choice. I took Australian citizenship, I left my citizenship. So it's individual choice what you want to do with that. And once you do that, you have got voter's right, you can run for elections, and so on. And to expect a government to give you all kinds of political rights to non-citizens I think is expecting too much from that government in my opinion.

On the other point now, can I talk about China, you said China right? Okay because both Takeuchi-san and Horimoto-san wanted me to comment on some points— I was nervous when Horimoto-san was kind of praising me, I thought there was some very difficult questions coming my way, but I was a bit relieved to hear they wanted some more comments on China and Australia. Actually, we could have a full seminar on the Australia-China conundrum, right, because China is a huge conundrum for Australia. I just want to give you a couple of examples.

You know, there is a new bank called AIIB which is the Asian Infrastructure Investment Bank, right, AIIB. And this bank, the country which initiated this bank is China. When Chinese wanted other countries to join this bank, Japan said no, and they have said no, and they will say no following the US which also said no, they didn't want to join. But Australia eventually joined, Australia joined the bank so Australia broke ranks despite lot of pressure on Australia from the US not to join this bank, not to sign up. But Australia joined. Why Australia joined it because Britain joined it, the Germans joined it, the French joined it, and Australia said that's good if they have joined, we can join and they joined. And that was a big step forward for Australia to not to accept what the US was telling Australia. So this tells us something that Australia perceived its economic interest in China and they jumped on that opportunity. Takeuchi-san, you mentioned about Paul Keating, his comment on US. You said disagreeable friend, this is what Keating said. So maybe this is kind of disagreeable friend which Keating talked about and we are seeing now Australia following it in that way.

重松 ありがとうございます。それでは今のジェイン先生のコメントに対して、竹内さん、あるいは堀本さんのほうから再コメントがございますか？

竹内 はい。中国が投げかけている Conundrum は、オーストラリアのみならず日本の Conundrum であり、アメリカの Conundrum であり、世界の Conundrum であるので、やはりこ

の話はもうちょっと深めたいところです。2010年に私はケビン・ラッド首相のインタビューをしましたもので、その時のことをちょっとお話しします。ケビン・ラッドさんは外交官出身でオーストラリアの歴史上初めて中国語のスピーカーである首相でした。東京の大使でマレー・マクレーンという大使がこの間までいました。今のミラーさんの前の大使で、これも名大使なうえチャイニーズスピーカーでした。いかにアジア諸国の外交官の配置の中で、チャイニーズスピーカーが非常に重視されているという、そういう印象があったわけです。それでさっきの *disagreeable friend* と絡んで、中国語でケビン・ラッドが時々使っていた言葉があります。諍友（ツェンヨウ）テンギョウって言う言葉です。日本語ではあまり使わないんですけど、「ごんべん」に争うって書きます。意味としては批判するけれども、*true friend* だという。そういう意味ではこれも *disagreeable friend* なんですね。だからアグリーばっかりするわけじゃなく、批判もするけれどもいいフレンドだということで、これはケビン・ラッドが首相時代に北京大学でのスピーチなどでも使っていた言葉です。

ケビン・ラッドさんに僕は会って、それでメディア用語で箱乗りと言いますが、結局彼の飛行機に乗り込むチャンスがありました。言ってみればオーストラリア版のエア・フォース・ワンなんですけれども、ただアメリカの大統領のエア・フォース・ワンはジャンボジェットですからばかだかくて雑音もあまりないんですが、オーストラリアの場合機種は忘れましたが、あまり大きな飛行機ではなかったんです。キャンベラからパースへ飛ぶ途中で30分あげるからインタビューいいよ、っていう話になって、ずっともう雑音がものすごいインタビューでしたけどね。その時には、「竹内さんあなたは、チュウネイスインシーですね」と、僕の名前を中国語読みして、非常に自分をプレイアップするのが好きな人でした。彼はとにかく中国重視の政策を採ろうとした。でも、結局僕はよく分らなかったことが多かったです。彼はやはり国防白書の中で中国に対しては非常に厳しいアクションを出し、ウィキリークスで暴露された。ウィキリークスというのはいろんな、外交における秘密の電文などをリークしちゃう、そういうメディアだったわけで、その中でアメリカとの間でケビン・ラッドが中国に対するいろいろな批判をしているのをすっぱ抜かれて暴露されて、それで中国が頭に来た。あとはケビン・ラッドが在任中には、ウイグルの民族運動をやっている人をオーストラリアに招いたり、あとハワード首相の時代にはグライ・ラマを招いたりということもあり、常にそういうことで物議を醸してきた。だから結局ケビン・ラッドもさっき言った北京大学でのスピーチなんかではチベットの人權問題を批判したりということの中で、中国との関係がどう強まるんだろうと思っていたら、起きたのがリオ・ティントという金属資源の会社の事件でした。

これは本当にグローバルな鉱山を持つ大企業ですけども、そのリオ・ティントの中国系オーストラリア人の支配人がスパイ容疑で中国で逮捕されるというようなこともあり、さまざまな意趣返しも含めて起きたように思います。それで特に、またジェインさんあるいは堀

本先生のコメントをいただきたいんですが、今興味深いことに、日・豪・印、この三カ国の協力が動き出しています。それから日・米・豪・印という、こういうフレームワークもあります。これはかつてハワード政権時代に、私はダウンナーという外務大臣に聞いたことがあったんですけど、ダウンナーは非常に消極的だった。こういったフォーメーションを取ることに、特にオーストラリアがインドと共同歩調を取ることに非常に慎重だった。しかし、今はそちらの方向に結構踏み出しつつあるわけです。ただケビン・ラッドの時代は中国からつつかれて、日・米・豪・印の中ではやっぱり弱い脇腹だったと思うんですよ、オーストラリアっていうのは。だからギラードがまたそっちへ動いたり、結構この三角形、あるいは四角形、日・米・豪・印ないしは日・豪・印は非常に論争のあるところなんですけれども、これは結局中国を刺激しすぎるんじゃないか。これをアジア版のNATOにしよう、つまり集団的安全保障の仕組みにしたらどうなんだという、さらに刺激的な論義も呼んでいます。この辺を考えると、中国問題のConundrumにどう対応するか、いろんなシナリオが、やっぱり強めのシナリオやもっと柔らかめなシナリオ、いろいろあると思うんです。

**重松** ありがとうございます。それでは今の議論の全体的な文脈に即して、もう少し聞いておきたい、あるいは内容について確かめておきたいという点がありましたら、簡単にコメントをいただけないでしょうか。

**小林** じゃあ一つ、中国に関する問題なんですけど、中国とオーストラリアの関係というのは、実はものすごく多様だと思うんです。政治的なものもあれば、経済的なものもあり、セキュリティ的なものもあればアカデミックなものもあるので、全部一つのボックスに入れて中国対オーストラリアというふうに分けるのは、もうちょっときちんとunpackしていかなくちゃいけないと思うんです。ケビン・ラッドが、今ちょうどお話しいただいたのでそれにちょっと付け足すんですけれども、目指した一つのこととして、やっぱり中国を深く理解することというのを目指したんです。その一つの試みとして、オーストラリア国立大学に多額のお金を投与して、ジェレミー・バーメという中国研究家を筆頭とした研究所を作ります。そしてこのジェレミー・バーメがケビン・ラッドのいろいろなスピーチを書き、知恵を入れていったというふうに言われるんですけども、そこでは新しい中国学、英語でnew sinologyと言うんですけども、そういうものを作って、その中でオーストラリアから中国の研究を世界に広めてゆく。それによってオーストラリアが世界の中国研究のリーダーシップを取っていくというような試みもありました。ですから、オーストラリアと中国の関係を見る時に、もうちょっと細かくいろいろな分野で別に見ていったほうがいいのではないかと、例えば環境問題でもやっぱり中国の問題は非常に今深刻です。特に内モンゴルとの間ではとんでもないことになっているという研究が、日本でも滋賀大学などで把握されていると思う

んですけども、ですからそういうことに対してはオーストラリアはしっかり、ノーと言えるオーストラリアとしてやっていく必要があるのではないかというところを、ご指摘申し上げます。

**Purnendra Jain** Thank you for your comment. Thanks very much.



追手門学院大学創立50周年記念事業  
国際シンポジウム

# 海域アジアとオーストラリア —政治経済の変動を読む—

英語・日本語  
逐次通訳あり

グローバル化の進展とともに、海を巡る国際政治が活発化している。中国がランドパワー（大陸国家）からシーパワー（海洋国家）へと変貌しつつあるなか、東・南シナ海や太平洋・インド洋を舞台とするさまざまな枠組みについて世界的な再編が進んでいる。本シンポジウムは、太平洋やインド洋という海域の視点から、アジアとオーストラリアを巡る政治経済の諸課題を検討する。

14:00 開会  
14:10

重松 伸司(追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所所長)

14:10  
15:30

第1部 基調講演

「オーストラリアのアジア・ディレンマ」  
“Australia's Asia Dilemma”

ブルネンドラ・ジェイン(オーストラリア・アデレード大学・アジア研究所教授)

15:40  
17:30

第2部 パネルディスカッション

「海域アジアとオーストラリアの21世紀を考える」

(司会)  
重松 伸司(追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所所長)

(コメンテーター)  
ブルネンドラ・ジェイン(アデレード大学教授) 堀本 武功(国際政治学者・放送大学客員教授)  
竹内 幸史(拓殖大学院講師) 小林 ハッサル 柔子(オーストラリア国立大学研究員)

17:30 閉会

2015年11月27日(金) 14:00～17:30(開場13:30)  
入場無料/先着50名様

会場 追手門学院 大阪城スクエア

〒540-0008 大阪市中央区大手前 1-3-20(追手門学院大手前中・高等学校本館6階)  
アクセス: 地下鉄谷町線「天満橋」駅1番出口徒歩7分/京阪電車「天満橋」駅14番出口徒歩7分(ドーンセンター横)

お申し込み 希望者は「海域アジアとオーストラリア」と明記のうえ、氏名・連絡先(住所および電話番号)・メールアドレス・所属をご記入のうえ2015年11月20日(金)までにE-mailまたはFAXにて下記までお申し込みください。  
※定員になり次第締め切ります。(FAXは裏面の申込み用紙をご利用ください。)

お問い合わせ 追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所  
〒567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15 TEL: 072-641-9667(平日 10:00～17:00)  
FAX: 072-643-9476 E-mail: cas@office.otemon.ac.jp  
ホームページ: <https://www.otemon.ac.jp/research/labo/cas/>

主催 追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所 後援 大阪日豪協会、オーストラリア学会

[資料] 国際シンポジウム「海域アジアとオーストラリア—政治経済の変動を読む—」